六種対照　日本書紀神代巻和訓研究索引

——目　次——

はじめに

〈研究篇〉

一　日本書紀の訓読について……三

（1）概観……三

（2）第一期（平安時代頃まで）……三

（3）第二期（中世頃）……四

（4）第三期（近世頃）……六

二　日本書紀の諸本について……一〇

——訓読上の特色から見た神代巻諸本——

（1）古　本……一一

・鴨脚本……一一

・丹鶴本……一二

（1附）類聚国史系の諸本……一二

・三嶋本……一二

・為縄本……一二

（2）吉田本系諸本……一三

・図書寮本（神代巻下）……一三

・北野本（神代巻上）……一三

・弘安本（兼方本）……一四

・乾元本（兼夏本）……一四

・水戸本……一四

・雅久本……一四

・國忠本……一五

（3）版　本……一五

（ア）全三十巻の版本……一五

・寛文版本……一五

・黒羽藩本……一六

・小寺清先『校正日本書紀』……一七

（イ）神代上下二巻本……一七

（a）闇齋版系……一七

・梨木改正本……一七

・闇齋改正本……一八

・下御靈社版……一八
（b）寛文版本系……一九
・青雲堂本……一九
・櫻園書院版……一九
・無刊記七行本……二〇
（c）その他（独自性の強いもの）……二〇
・田中頼庸校訂日本紀……二〇
（4）注釈書の類……二一
（ア）中世までの諸注釈……二一
・日本紀私記……二一
・釈日本紀……二一
・日本書紀纂疏……二二
・日本書紀抄（鈔）の類……二二
（イ）近世以降の注釈（版本）……二三
（a）全三十巻の注釈……二三
・書紀集解……二三
・日本書紀通證……二三
・日本紀標註……二四
（b）神代巻上下または神武巻までの注釈……二四
・神代巻口訣（神代口訣）……二四
・神代巻直指詳解……二五
・神代巻講述鈔……二五
・神代巻藻鹽草……二六
・神代巻鹽土傳……二六
・神代紀髻華山陰……二七
・神代紀葦牙……二八
・稜威道別……二八
・神代紀伝……二九
・神代巻講義、神代巻風葉集……三〇
・歌謡の注釈書……三〇
（5）仮名日本紀の類……三〇
・享保版……三〇
・田嶋素碩写本……三〇
（6）書き入れ本の類……三一
・吉田凡舜校本……三一
・源清爾校本……三二
（7）活字本……三二
三　日本書紀神代巻諸本の訓読上の特色について……三六
（1）神代巻諸本の訓読に見られる語彙……三六
（2）訓読の実際……四四
字音の表記……四四
音便形とその表記……五一
語句の単位の訓読……五四

再読文字の扱い……五七
使役の意を表す文字の扱い……五九
助字の扱い……五九
敬語表現……六一
四　今後の研究への展望……六四
五　漢文訓読資料の和訓索引作成に於けるコンピュータの利用について……六六
（1）国語史研究におけるコンピュータ使用の現状と問題点……六六
（2）本稿索引篇・検字篇作成の経緯……六九
（3）今後の課題と展望……七二
おわりに……七五
〈索引篇〉……一
〈検字篇〉……七六一

一　日本書紀の訓読の変遷について

（1）概　観

日本書紀の本文及び訓読の拠って立つ所のテクストは、流布本である寛文版本、及びその基となった中世の吉田家ゆかりの諸伝本と、より古い時代の伝本やその訓読を伝える『日本紀私記』などの類とに大きく分類することができ、前者を「吉田本系」、後者を「古本系」などと呼び分けることが多い。これらの他に従来あまり注目されることがなかったが、近世に至ると、国学など古典研究に関わる諸学が隆盛を見、日本書紀についてもその成果を活かした本文の校訂や訓読・解釈が行われ、先の二類とは異なる特色を持つ多くの伝本や注釈書の類が残されている。むろんこれらは相対立するものではなく、連続的な流れや広がりの中にあると見るべきなのであって、互いに前代の成果をふまえて成り立っているのであり、相互に密接な関係が見られるのみならず、むしろ前代の訓読や解釈を重視する例が多いことは多くの先学の指摘されてきたところである。

一方、漢文の訓読一般を見た場合、元漢文の性質や、訓読・解釈を担う者の違いによって、また時代によって、その実際に様々な差異の見られることも事実である。書紀の訓読と関係が深いと考えられる漢籍の類の訓読についても、個々の漢字や語句の訓み方をはじめ、係り受けや呼応、再読字や助字の類の扱いなど、様々な点での差異や変遷が明らかにされている。日本書紀の訓読はこのような漢文訓読一般の中にあってどのように位置付けられるべきなのであろうか。現存する個々の諸伝本に見られる訓読上の特色については、既に多くの先学のご研究があるが、改めてこれらを比較検討するには、先ず日本書紀の訓読がどのような目的で、どのような人々によってなされてきたかを考えてみることが必要であろう。これを、撰進以来平安時代頃まで、中世、近世の三期に大きく分けて、概略を考えることとしたい。

（2）第一期（平安時代頃まで）

先ず、第一の時期についてであるが、これは撰進の直後から数次にわたって行われた「講書」の場での、訓詁学的な立場に立つ博士諸家による訓読や語釈の研究が主である。この跡は現存する『日本紀私記』の類や当時の書紀諸本の訓読、さらには次の時代以降の日本書紀諸本に伝えられる訓（例えば「江点」や「養老私記云」などとして別訓に掲げられたものの類などがこれにあたると思われる。）や諸書に引用されたいわゆる「書紀古訓」の類など